

未熟者 若氣の日記

より

山崎 茂男

まえおき

私の生家は福生第一小学校のすぐ前にある山崎製麺工場である。兄弟は六人だったが、弟を一人亡くしている。今は家業は兄が継いでいる。その兄は小学校入

学前、父の仕事場で遊んでいて製麺の機械に右手先をはさみこんで四指の先半分を失ってしまった。兄が小学五年生のころ、小学校の担任の先生がたびたびうちに来てくれて、手が不自由な子だから学業で身を立てさせるようにと、兄の中学への進学を父にすすめてくれた。父は、商人の子を学校へやっただめになると先生にいいはったらしい。

私も五年生になったら担任の先生に進学をすすめられたが、兄のことがあるのでいっさい父に話さなかつ

た。そして六年生をおえると小学校高等科にすすんだ。当時は、六年生で卒業してすぐに子守奉公や小僧さんに出る者も多かった。中学への進学者は一割そこそこの人だったろう。

どうしたことかこのわからずやに思えた父が、私が高等科をおえたら夜学に通ってもいいと言った。「軍隊にとられたら苦労するから」ということだったようだ。昭和十六年に私は府立二商の夜間へ進学できた。間もない七月に父が亡くなってしまった。その年、十二月には日本は米英と戦争となるが、それまでに国のすみずみまで軍国調になっていて、若者はつぎつぎ兵隊にとられ、また軍関係の職場に徴用されていた。

わが家の仕事もそういうことで、それまで働いていたよその人達がいなくなつて、父の死亡時は家族だけの

仕事になっていた。私は、昼間いっぱい仕事をして夕方四時から八王子まで通った。その一学期の期末試験という時に父の死であった。考えることもなく私は学校に退学を申し出た。その時の担任の先生ががんばれと励ましてくれて退学は思いとどまった。しかしそれからは学校へ行くのがやっとのこと、とても勉強どころではなかった。当時の夜学は真の苦学生が多くよく勉強していたので、このありきまで私はついていけなくなっていた。まして、あと何年かすればどうせ兵隊にいかねばならない。勉強したって……という思案ばかりだった。

戦争はますます激しくなり、どこの家からも兵隊さんが出征していった。兄もその齢になっていたのに手の中で軍隊に行かずにすんだが、その分青年団員で銃後関係の役目をおおせつかって忙しかった。地区の会合のおりなど「山崎では兵隊にいてないから」といやみのようなことを言われたりで、私はいたたまれぬように一年早く兵役を志願した。その軍隊が通信学校で、そちらによわいたちの私はとても辛かった。そこが半年になるころ終戦となって生家にもどれた。もとのように家業を手伝いながら法政大学専門部の夜間に通いだした。じつは軍隊の半年が学歴に入り、専門部の一年に編入できたのだ。ここらでは父の考えがあ

ったような気配であった。しかし大学は停電・休講が多く、私自身の勉強不向きもあって、ただ通うだけという状態だった。

おせっかいが進んで

こんな不勉強の私が、なぜか筆まめで前から日記をつづけていた。戦前はちらんばらんだったが、戦後の二十二年からは一日も休まず子供じみた文を書き続けた。

やはり、軍隊から帰ってしばらくは日記どころではなかったらしく、書き始めたのは二十二年の三月からだ。その以前、家業を手伝いながら、すぐ裏が小学校の校庭であることから学校にはわりと関心があった。そのころ、日本の敗戦で独立国となった韓国の青年達が、その校庭で大勢でボールけりを楽し気にやっていた。こそこそと大人が何人かで追いかけてこぶうなことをやっていたのは、警察の人が共産党の人に追いかけていたのだとも、あとから聞いた。夜には、米兵がパンパンと言われていた女性と手をつないで校舎の裏の方へ出入りする姿もときどき見た。少し後に小学校に勤めたら、宿直の朝は裏庭や廊下のところのこの人達の散らかし物を、生徒がくる前に探す役もあった。何より気になったことがあった。近くの子

一九四七年（昭和二十二年）

三月二十四日（月）晴

供が夕方校舎のまわりで遊んでいて、外便所の窓に石のあてっこをしている。ガラスの割れる音がうちにも聞こえたからそちらを見ると、職員室に先生がいてもそのままのことがあった。おせっかいな私がとんでいって先生や子どもにもんくを言ったりした。そんなことから先生と議論したり親しくさせてもらって、しげんと教育ということに心を寄せた。大人は生活に追われている。世の変わり方にとまどって子供達は荒れている。そうだ、ひとつ子供のために何かをやってみよう。そう思っているうちに、子供を集めてそろばんを習わせてみようとなった。同じ仲間によびかけてみたが、賛意は表されても行動はしてもらえなかった。一人でやってみることにした。そろばん会のポスターをはって会員を募ったら、入会を申込んできたのは役場につとめている女性や農業をやっている若者達とかであった。ねらいとしていた子供はいないまま、とにかくそろばん会を発足させた。一人ではやりきれなくて、昔の小学校の恩師や先輩達に応援を頼んだり、この会は magari なりにも進められた。

前置きが長くなったが、あとは私自身の日記によって書かせていただく。

【当時、何も知らぬ私の走り書きなので、内容によってはご迷惑もと思いますが、原文のままをお許し下さい。】

和尚さんは素足である。冷たいなどと云ふことは知らぬらしい。やはり修養であると思つた。今日は彼岸の明けで太鼓を叩いた。この太鼓は万歳の意味だと云ふ。何事によらず行事を祝して太鼓を叩き万歳を祝うと云ふ。お寺には太鼓・戒尺・もくぎよ・等々いろいろな鳴物が多く、その奏法はとてむづかしいそうだが、京都大徳寺では食事の知らせの雲板が、檜の木の厚さ五分もあるものに穴がぶちとおつてゐるそうである。何百年も使つてゐるそうだ。このお寺でも鐘を叩く棒が、ねずみにでも食はれたやうにずつとけづられてゐる。これも毎日の修養の印だそうだ。

【学校の先生達との会話に心の貧しさを知り、またそろばん会の運営に悩んだりして、ふと某寺の朝の勤行に参加させてもらった。この時期、ほかにだれかいるわけではなく私一人であった。】

三月二十五日（火）雨後晴

○今日はなま暖かい雨が降つている。和尚さんは昨日、共産党員の家へ法事に行つて、その時の党員との話をしてくれた。差別なき平等というものに対して、人間の法則は永続するのはむづかしい、だから自然の法則、

○今日、最終日の泰西名画展を見に行つた。上野駅で下り美術館へ行く途中も雨は盛んだつた。切符を買ふ列が動物園の前まで並んでゐる。これでは中へ入つてもゆつくり見られないと思つてゐるが、成程、中はものすごく混んでゐた。一時ごろ頭が痛くなつて外へ出てしまつた。それにしても陳列場が下手だ。天井はすすけた硝子、うす暗い部屋、そしてこの混雑では突く気分を害する。ましてフランスの画と云ふものが少しもわからない。セザンヌ・ミレーの絵も変な画だと思ふ。

○今夜のそろばん会をはるばる青梅から原島・中村・久保木さんがきて呉れた。二室に分けて練習したが、三人の指導はきびしい処があるのでぜん皆が驚いてしまつた。松岡さんなら初歩から指導してくれるのに、やはり此の三人を迎へて失敗だと思つた。俺の未経験故であらふ。

【そろばん会には、大学の友人の松岡さんを迎えていた。松岡さんはれっきとした都内の高校の先生。青梅から人は技能優秀な知人だったが教育関係者ではなかつたと思ふ。】

三月二十六日（水）晴

○今晚の謡で長久先生が、青年運動への発言をされた。この地方の青年ぐらひに組織されてゐればもつと堂々と町の政治に出るべきだと云ふ。俺はこの説に反対した。青年の純情をボス連中にむしばまれたくはない。現在、正しい生活をしたら食へぬのはわかり切つてゐる。さりとてそれでは青年の進歩をはばむとすれば青年に犠牲を強ひるばかりだ。青年は矛盾に苦しむ。

【田村酒造の前に長久さんという戦時中の軍人がいた。元中将だと聞いていた。敗戦で田村さんの貸家に入つていたが、息子さんはまだ満洲にいて老夫婦だけで生活に困り、田村さんを通じて謡のお弟子さんをとつていた。できれば食糧を持参できる弟子をとつて、地元の細谷利男や井梅伊助さんが田村さんから指名された。利男さんはそれで俺をさそい、三人で夜、謡を習いに通つた。ある時、先生に頼まれてけいこ本を買いに神田へ行つた。地図を書いてもらつていったが、あたり一面焼けくずれた所で、探すのが大変だった。目ざす檜書店はその中にポツンと三階建て残つていた。一冊定価六十二銭、特別行為税三銭で、売価六十五銭とあつた。】

三月二十七日（木）晴

○青梅の久保木さんは七時前にもう学校に来てゐられた。小学校の生徒を三人連れて来た。彼も教育者を目ざして、このそろばん会にいろいろ学ばうとゐふらし



戦前から戦後にかけての青年団活動の本拠地だった青年団倶楽部。第一小学校のすぐ前にあった。(スケッチは山崎)

い。俺は考へが浅い。久保木さんに頭が下った。

三月二十八日(金) 曇後雨

○七時に福生を発つて読書会一同は先づ泰西名画展へ行った。型通りの見学をして十二時に帝劇へ入った。

帝劇での青年劇が左傾であると聞いていた。しかしこの劇には学ぶべきところばかりで嬉しかつた。ただ人を殺したことに對する良心がとかるふ文句に對してわからなかつた。帰路雨が降つてゐた。電車は乗車制限で混乱してゐた。近くでぶらぶら時間をつぶして帰つてきた。

【青年団の中に読書会があつて細谷利男さんが中心になつていた。青年倶楽部が会合所で輪読したり本に關係する演劇見物に都内まで出かけた。この読書会はのちに青年団OBだけの会員になり、道芝会と稱して会合所を私の所にした。道芝会は内容を変えて今も存続している。】

三月二十九日(土) 晴

○妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五に入つた。これだけの文の中に無限の教訓が含まれて、迷ひの人間をすくひ給ふとるふ。このお経に對しては一切の疑念を捨てて只管信仰の境地でと説かれた。しかしこのお言葉に服従はむづかしい。そんな心でお経を読んでこれでいいのか。

○読書会は八時からだつた。今夜は松本さんを迎へて

話してもらつた。松本さんの理論に俺は反抗的意見をとつた。理論どほりの修養は至難だ。そこに青年を感化させるなんて危険だぞ。

四月一日（火） 晴

○今日、山崎先生がそろばん会にこられた。あとの雑談で六・三制の改革のこと、また転勤で福生に来るかもと云ふ話から、おまえも教職にどうかと洩らされた。「希望があればすぐに手続きするから履歴書を書いて」と云われた。資格が問題でしやうと云つたら「資格ではない、要は人格だ」とのことであつた。先生は俺を信用しておられる。うっかり言葉に甘えて先生に迷惑をかけてはと思つた。まだ大事なことがある。家のことだ。俺と云ふ労働力が今なくなると兄には一大事だ。夜になつて思いきつて兄に相談してみた。兄は流石に驚いた。然し、この機会を庄へることは以後の俺の生き方に問題がのこる。結論は俺のかわりに大至急だれか人をさがすとゐふ。そうなると俺は自分を疑つてくる。そんなこと（教育者）ができる人間かと。然し此の際一大決心をしなければとあせり気味のやうでもあらう。

四月二日（水） 風強し、晴

○晩に山崎先生の家へ出かけた。先生はこのごろマージャンに凝つてゐるそうだ。仲間が良い人だからと先

生の母親が云つてゐたが、先生も母親からみれば子供には変りがないのだらう。八時ごろ先生が帰つてきて俺の履歴書について話が始まつた。陸軍のことが多少問題だらう、大学の夜間のこともあると云われた。でも適格検査は大丈夫だらうと云われた。十時過ぎまでかかつた。

【山崎彦尚先生（元青梅一小校長）は私が高等一年の時の担任であつた。要領の良かった私はそれまでの先生に叱られた覚えは殆んどなかったが、この先生には何回もやられた。将来何になるつもりだと職員室でしぼられたことがあつた。「うどんなやになる」といったら「先生になつてみる、師範学校に行くんだ」と言われたこともあつた。父が死んでからこの先生のところへ足を運びだし、それからは繁くお世話になつていた。そろばん会のことでもずいぶん面倒を見ていただいた。】

四月三日（木） 晴

○初の公選町長選挙もあと一日後となつた。演説会もたけなわである。岸さんの演説を今日聞いた。なんとなく人に書いてもらつた原稿の棒読みみだつた。無所属で政策は修正資本主義と云つてゐた。その後援者は殆んど停車場付近の連中のやうだつた。結局森田幸造氏の農民派との対立であるやうに思へた。

【第一回知事・市町村長の選挙であつた】

○浜中先生から『ふるさと』にのせるのでそろばん会の記録を下さいと云われた。「記録つてなんですか」と云つたら、「出席簿だの授業日誌ぐらいなければ反省も出来ないでせう」と云はれて、それはそうだと思つた。仕方がない、今からでもと思つたが、俺のぼんやりぶりがはつきり露呈した。

【『ふるさと』は浜中先生（元福生五小・四小校長の若下伴蔵先生）がガリを切り、当時の福生の青年やこの周辺の小学校の先生たちで、西多摩地域の教育・文化に関する記事を編集発刊されていたものである。】

四月四日（金） 晴

○今朝は観音経の前置の部分から核心の部分へと話が進んだ。先づ七難の中の火難である。古人の、「火もまたすずし」と云ふ如く、真に悟つたならば火中に入るも難をのがれ得ると云ふ。それを疑つて聞いてゐる俺は駄目なのだ。

○昼ごろ、隣の業者から急報がきて、警視庁から取しらべがきているからとのこと。これは大変と工場の中をかたづけたりしたが大変なことだつた。まもなく三人の男がきて姉が答えていた。俺は裏の方にかくれていた。配給量に対して全部供出してゐるのにいきなりおどしのやうだ。話のあと昼食の弁当は彼等は白米であつた。お役目故にこうして食糧を扱う仕事に対し

て摘発ばかりしてゆく。真の働く者の姿などわかるものかと、左傾してゆく労働者の言分もわかる気がする。そのあと衛生検査とかで別の人が工場を見て行つた。○今日は町長と都長官の選挙である。町長は二人の候補者が身近なのでわかるが都長官は始末が悪い。前任者の安井か社会党の田川か、どちらにするかむづかしかつた。

○村野が夜遊びにきた。二人で口論になつた。彼は十の力を持つまで力を蓄へるという。それから社会に出るのだと。俺は三の力で社会へ出てあとは努力すると云つた。三の力では無責任だと俺をせめた。そしてこのごろの山崎は行動にあせりがあり、軽はづみが目立つと云つた。先日の浜中先生の話も同じやうで俺は反省しきりだ。

四月七日（月） 晴

○和尚は表の戸をすつかり開けて仁王立ちで鶯の声にききほれてゐた。今日は風難の節である。鬼の話、試胆会の話が続いた。和尚でも、やはり墓の中は気持の良いものではないそうである。それをこわいと思つた時には、こわいばかりが人の体に入りこんでゐるので、観音経のご利益にすぎると云つた。

○今夜のそろばん会に、男女のチンピラ風が入つてきてうるさかつた。帰りに門のあたりで様子が変わるので

行つてみたら、生徒の一人とチンピラとなぐりあつてゐた。一応仲裁に入つてほかの者にまわりで警戒を頼んだ。青年俱樂部では共產党の伊藤律が演説会を開いてゐた。一寸のぞいていたら、先程のチンピラがまだ何かやつてゐると云ふので、そちらに行つて話しあつた。だんだん暖かくなつて夜の集りはこうした困つたことが多くなる。

四月八日(火) 曇

○夜、山崎愛治先生の住宅へ遊びに行つた。先生が「福生にきて初めて知つた青年がきみだ」と云つてゐた。今夜は和田さんと云ふ先生希望の人がきてゐた。和田さんが男女共学について相談にきたと云つたが、先生は男女の共学が人間本来の自然の姿なのだから、それに対し特別の対策等する必要はないと云つた。また教育者は完全な人間でなくて、これからは生徒と共に学ぶのだと云ふ。牛を引いたのは過去の先生であり、牛を後から注意して前へ進ませるのがこれからの先生だとのこと。面白い話だつた。

四月九日(水) 雨、午後晴

○学校の裏の館田さんを尋ねた。話はそろばん会のことから青年団の町長選挙後の動向などだつた。この人の話はむづかしい。この町の青年団が、幹部以下これだけの活動をしていながら表面に動きのないのは、青

年運動そのものを知らぬのだと。もつと青年が政治に目ざめることであり、政治に目ざめるとは政党政治を論ずるのではなく、青年の世界観、人生観を研究しなければと云ふ。知識的若者が青年団を敬遠しているのは、青年団の行き方が青年性を失っていると云ふのだ。

四月十三日(日) 晴

○夕方、山崎先生の家へ出かけた。福生の学校へ入れそうだと云ふ。福生の学校へとなつたら町の人がさわぐだらう。先生は、今後の教育は非常にむづかしい。教育内容の改革も大変なものである。新教育の進歩性を示すためにも君の出発は意義があるとおだてられた。

先日、浜中先生にも意見を聞いたら、今更力が云々を云つてゐる時ではないと決意をうながされた。

○謡の長久先生の家へは大連からの引揚家族が同居して、先生の孫にあたると云ふ二人の女の子が賑やかだつた。

四月十五日(火) 晴

○兄の代役で小金井堤に業者の花見に出かけた。花はきれいだが、埃道を自動車突走つてたまつたものではない。酔つた人が愉快に踊りさわぎ、傍をジープに乗つた米兵が手をあげて去つて行く。敗戦国の春の感が深い。

四月十九日(土) 晴



昭和22年の福生町役場風景。手前の畑は現 NTT の建物等になっている。(山崎画)

○あかぎ会の会合があつて傍聴した。今日は赤旗の記者と云ふ人をかこんで座談会だつた。徳田球一のやうな感じの人で、終戦後に共産党に入つたのだと云つてゐた。

【あかぎ会は文学の趣味の人達が、小学校の職員室を借りて会合をもつていた。羽村小学校の教員であつた今井誉次郎氏も会員でよく見えていた。】

四月二十日(日) 晴、午後曇

○参議院の初の選挙日であつた。参議院と云はれても何もわからず義理みたいに書いてきた。それでも青年団は大分熱心で、未投票の家によびかけにまわつたり、投票所の自転車あずかりもしてゐた。晩には都議会の候補者の立合演説会があつた。いつもの会とは違つて共産党の候補者が攻撃され、それに弥次が飛んだりして面白かつた。青年のやうな情熱を感じさせられた木崎茂男には拍手が多かつた。野島武吉は人を食つた話しぶりだつたし、共産党の中野候補にはいっせいに弥次がとんだ。

四月二十一日(月) 雨後風強く晴

○裏の小学校の浜中学校長先生が調査表をもつてこられて大至急記入をとのこと。夕方、愛治先生の話で、この学校で四人ばかり新卒の先生を求人したが、一人はどうしても欠員で、そのかわりに俺が指名されてゐる

と云ふことだつた。

五月三日(土) 雨

○あかぎ会の会合だつた。今晚は作品の批評会である。同人の『うたごえ』の方から二人ばかりお客が来て今夜は勢揃ひだ。愛治先生の奥さんは子供を連れて来てゐた。佐藤文之助氏の高等数学(詩)、菊地先生の創作、愛治先生の作品等に対する批評。浜中先生と並木先生が笑く他の会員とは別個の存在であることが目立つた。浜中先生の議論は強い信念の力があるやうに思へたし、愛治先生、菊地先生は頭を鋭く使つての発言のやうだつた。今夜は利男さんも参加したが愉しかつたと云つてゐた。会員の人は二時から三時ごろまでしやべつていくと云ふが、俺は飽きてしまつて十一時ごろ帰つた。

五月四日(日) 晴

○演芸会が今日にのびて校庭で行はれる。仕度に時間がかかつたらしく三時からと云ふのが四時半に始つた。大分舞踊が多かつた。晩には謡があるので出なければならんし、松本さん達が音楽コンクールをやると云ふのでそれにも出たい。結局七時半に謡に行き、十時に帰つてきて三十分ばかり演芸を見物して、井上さんの家でやつてゐる音楽コンクールに出てみた。一般からの花が二万円もかかつたそうで、これには驚いた。べ

ートーベンの名曲とはやり歌とが交つて聞こえてむづかしい感じだつた。高級な女の人も何人か見えてゐたが、わけのわからぬものに耳を傾けてゐるのも辛かつた。

五月五日(月) 晴

○憲法祝賀の山車の列が昼と夜と各部落交互に本町通りへ押寄せて賑やかだつた。山車は、俺が小さい時羽村のお祭りで見たが記憶がうすい。きれいな列に人が多くて本当にお祭りだ。然し、山車の正面に憲法祝賀と書かれてゐるのが悲しいものでもあつた。若者は夢中で汗を流して太鼓を叩き騒いでゐる。町を挙げてのお祭りである以上はつまらぬ見方はすべきでないが、遠くは米ソの関係緊迫でB29の演習と噂も聞いてゐるので、なんとも不安である。

五月七日(水) 雨

○上野で現代美術展があるので朝早く出かけた。美術展は人が少なくゆつくり見られた。洋画を見てあとほとんど素通りして日本画はよく見た。鶴田吾郎のある方向を目指す画と和田英作の美しい絵が印象的だつた。帰りは神保町で額縁を二つ買った。三号が一八〇円、四号が一五〇円と安物ばかり買った。

五月九日(金) 晴

○今日から進駐軍の夜間外出が始まるそうだ。これは

大変だ。ソロバン会の女性の出席はとりやめようかと云ったが、男性がそれぞれ一緒に通うことでおたがい気をつければとなつた。

五月二十日(火) 晴

○今日は六大学の野球見物に出かけた。法政と立教の試合があるので、たまには応援をと思ひ出かけてみたわけだが、延長の末、大負けした。応援席にいるのは、楽でない。負けがはつきりしたので帰ろうとしたら、出口で応援団にどなられた。もとにもどつて応援を続けたがうんざり。

○今日の学校は(法政)まだ先生もあまり出て居らず、休講が多くて帰ろうとしたら、松岡さんとばつたり逢つた。二人で学校の食堂でみつ豆を食ひ、神田へ出て行くのを飲み、あとは上野から鶯谷までぶらついて帰つた。新国会開会の祝賀煙火が宮城であげられてゐて、上野からもその方が明るく見えてゐた。

○社会党内閣首班がやつと決定したかと思つたが、社会党左派の為に日本民主から苦情が出て、連合内閣は亦難関。吉田内閣は総辞職したが、さていつになつたらつぎの政府が出来るのか。我々にはまつたくわからない。

五月二十一日(水) 晴

○晩に、浜中先生と田村四郎先生が二人で画会の様子

を聞きに来た。俺の絵を見せると云ふので全部出して見せたが、色彩が単調であると云ふのと、筆使ひが細かいのでむしろ日本画が適してゐるかもと批評された。でもこういふ人が画会を応援してくれるのはうれしい。

五月二十二日(木) 晴

○亦今日は松岡先生が珠算をやつてくれた。中学生が二十人来てゐたし、小学校の方から金子先生・田島先生の生徒が大勢来たので、半分は俺の方の教室でやつた。夜六時からのソロバン会の方は定位法をやつた。

【青年達のソロバン会は順調だった。このころは小・中学校のクラブ形式の授業を担当させられてもいた。今の一小の所に小・中学校は同居であつた。】

五月二十六日(月) 晴

○浜中校長先生からの言葉で、都の教育局審査室へ審査の様子を聞きに行つた。南条さんと云ふ人だつたが、全く役人臭くない人なのに驚いた。結局、軍隊関係があつてむづかしいから今少し待てとの事であつた。

五月二十八日(水) 晴

○不動様で新しく不動講を開いて、それのお祝ひに青年の囃子連中と素人演芸が頼まれたと云ふ。五月は月初めから演芸会だらけだつたが、これらについて青年がお金をうけとつてゐると云ふことで考へさせられた。

五月二十九日(木) 晴

○内閣総理は片山哲と決してから幾日にもなるのに、内閣がいつ組織されるかわからない。社会党はなんとか団結してゐるらしい。芦田・吉田・幣原等と云ふ人の動きが新聞でいろいろ出ているがどうなるのか。

五月三十日(金) 晴

○謡の長久先生は息子さんが軍隊から帰ってきてきて岐阜の方へ引越すと云ふ。それまでに君達を今少しものにしたいから、こちらで都合つけば何時来てもよいからと話があつた。長久先生のご好意がありがたい。ソロバン会があつてあまり出かけられないが、先生の努力に俺の真心も少しでもあらはさねばと思ふ。

おわりに

わけのわからぬ自分勝手な日記をお目にかけて誠に申訳けないことです。当時の一青年の生き方がわずかにご参考になるかもと公表させていただきました。読み返してみても、若さゆえとはいへ、いかに各方面の人にお世話になりました。またご迷惑をおかけしてきたかと思ひ知らされました。関係の皆様紙面に失礼ですが、深くおわびとお礼申し上げます。

(やまざき・しげお 福生珠算学校校長 志茂在住)

福生市史資料編 近世 1

(平成元年2月刊行)

福生村・熊川村の二ヶ村からなる近世の福生市域に伝存する古文書から、『市史』に必要な史料を厳選して三冊に収載。本編は近世資料編の第一冊である。

第一章 村の概要 第三章 村政と村の生活

第二章 支配 第四章 戸籍と人口

A5版 四七〇頁 三八〇〇円 送料三一〇円

福生市史資料編 中世 (昭和62年刊行)

市域を支配した領主たちの文書を中心に採録し、大石氏・北条氏照の文書を網羅する。民衆と宗教のつながり、多摩地域の宗教史を考える上で好史料集。

A5版 五七二頁 三八〇〇円 送料三一〇円

福生市史資料編 考古 (昭和63年刊行)

考古学研究、主要遺跡・遺物、板碑を収録し、福生市の考古学研究の集大成。

A5版 三一四頁 三七〇〇円 送料三一〇円

福生市史編さん室 〒197 福生市本町五番地

☎〇四二五(5) 一五一